

## 南仏治安情報（1月分）

### ● テロ、反社会的活動、大規模デモ（邦人被害なし）

#### （1）パリ発生テロ事件直後の、追悼集会の開催

7日にパリで発生したシャルリー・エブド社襲撃事件を受けて、同日仏国内の各地で哀悼と抗議の意思を表明する集会が自然発生し、多数の市民が参加した。トゥールーズでは1万人、マルセイユでは7,000人が参加した。11日にはマルセイユでの6万人を筆頭に各地で追悼集会が開かれ、全仏で約400万人が参加する大規模な集会となった。

#### （2）パリ発生テロ事件後におけるイスラム教徒等を狙った各種事件の頻発

7日にパリで発生したシャルリー・エブド社襲撃事件以後、仏国内複数都市でイスラム教徒やモスクに対する破壊行為が発生した。南仏では7日夜にオード県ポー・ラ・ヌヴェルでモスクに向けてペレット・ガンを用いた射撃が行われ、同夜ヴォークリューズ県カロンではイスラム教徒の乗る車が何者かに銃撃された。8日夜にはアルビ近郊のモスク正面に銃弾4発が撃ち込まれており、12日朝にはコルシカ島コルトのモスク付近に豚の頭部と内臓が吊される事案が発生している。

#### （3）パリ発生テロ事件後におけるテロ対策の開始

テロ対策の一環として、12日の朝からマルセイユ市内にある19のユダヤ人学校に警官隊が配置されるようになった。警官隊は朝夕の通学時間帯に防弾チョッキ等の対テロ装備を施した上で配置される。エクサン・プロヴァンスでは約20のユダヤ人学校が対象となっている。

#### （4）テロ対策法の施行

16日、テロ対策法が施行となったことから、フランス当局はジハードイストをを目指す者による仏国外への渡航を食い止めることが可能となった。この法律により、当局はテロ目的で渡航すると認められる深刻な理由ある者の旅券や身分証を押収することができ、また仏人に限らず仏在留資格を持つ者が重大な脅威であると認められた場合に同人の仏入国を阻止することができるようになった。

#### （5）ニュースで発生した「反イスラム」デモ参加者による騒擾事件

18日、ソーシャル・ネットワークを通じて広まった、反イスラムに抗議する無届けデモがマセナ広場で発生し、40名程度の参加者の一部が路面電車の運行を妨害し、「アラーアクバル」等とテロ行為を礼賛するかのような言葉を叫んだことから、男女5名が身柄を拘束された。うち女性1名は警官を侮辱する発言をしたとして有罪を言い渡され、罰として「市民としての訓練」を受けるよう命じられた。残る4名の処遇は2月中に決定す

る見込みである。

(6) アヴィニョンで発生したイスラム改宗女性の離仏事案

アヴィニョン在住の22歳仏人女性が「イスラムを聖地に生きる。フランスには戻らない」との書き置きを残して失踪する事案が発生し家族から捜索願が出ていたところ、25日に同女がトルコにいることが確認された。アヴィニョン検察は、本件捜査を同地司法警察に託した。

(7) エロー県リュネルにおけるジハーディストの一斉検挙

27日早朝、リュネルでジハーディスト5名が身柄拘束された。今回の検挙は1月初旬から予定されていたが、パリでの連続テロ発生により延期されていたもの。同市内の複数箇所を封鎖した上で警察及び憲兵隊の特殊部隊が投入、検挙活動を行った由で、本件はパリ司法局のテロ対策部が担当する。今回の一斉検挙は、先にシリアやイラクに赴いた者達との繋がりを突き止めた当局により実施された。人口2.6万人のリュネルからは、既に約20名のジハーディストが出国済みで、そのうち6名が既に死んでいる。今回拘束されたジハーディストの中には、モスクに通い詰めていた者もいたという。

(8) ニースで発生した小学生のテロリスト擁護発言とその波紋

28日、小学校にて8歳の男性児童が「自分はテロリストの味方」と発言し、警察沙汰となり物議を醸した。この児童は、シャルリー・エブド社襲撃事件の翌日学校で催された黙祷及び校庭での「連帯の輪」に参加することを拒んだ。その直前にも「フランス人は殺さないダメ。僕はテロリストの味方。イスラム教徒のしたことは良いこと。」等大声で叫び、教師らを驚かせた。この児童の言動により児童間の諍いが起こったことから、最終的に校長が警察へ通報するに至った。警察はこの児童の他父親からも事情を聴いたが、児童がどこから知識を得たかについては明らかになっていない。警察責任者は今回の介入について、正当性を主張しつつも行き過ぎを認める発言をしている。

●殺人（邦人被害なし）

(1) フォス・シュル・メール近郊で発生した変死事件

9日夜、Saint-Mitre-Les-Rempartsにある住居内で、マルティエグで働く70歳女医の変死体が発見された。遺体は喉の部分に傷があったが検視の結果この傷は致命傷ではなく、同女が死亡直前に交通事故に遭っていた等の見立てが出るも裏付け証拠はなく、自然死の可能性も含め事実関係は未だ不明である。

(2) マルセイユで発生した高校前での男子高生依頼殺人事件

12日夕方、11区の高校でバスケットボールの試合中に自分にボールを回さなかった男子生徒を恨んだ女子生徒が従兄弟2名（17歳と18歳）に復讐を依頼し、同依頼を受けた2名が学校前で男子生徒を待ち伏せし、抵抗する間も与えずに刺殺するという事件が発生した。女子生徒を含む被疑者3名は全員検挙済。本件発生を受け、アルメニア組織の代表は「アルメニア、アラブ両地域社会間の平穏を脅かす重大な事態」と受け止めた。17日に行われた本件被害者の追悼行進は4,000人が参加する大規模なものとなった。

(3) マルセイユで発生した対立抗争とみられる殺人事件

15日になったばかりの深夜、16区カステラーヌで25歳男性が何者かに自動小銃で撃たれ死亡した。現場にはカラシニコフで使用されるような薬きょうが数十発残されており、犯人が被害者を追跡して殺害した形跡があった。警察は本件を薬物絡みの対立抗争とみて捜査を進めている。

(4) ヴォークリューズ県ル・ボーセットで発生した隣人による押し入り殺人事件

14日未明、28歳の男が隣家のドアを破って屋内に侵入し、47歳のモロッコ系イスラム教徒の男性を刺殺した。犯人は既に逮捕され、精神鑑定が行われている。被害者の遺体には17カ所の刺し傷があり、現場に居合わせた妻によると、犯人は「俺はお前の神だ」等叫びながら被害者に襲いかかっていた由。近隣住民の話によると、被害者と犯人とのトラブルは見受けられなかったとのことであった。

(5) マルセイユで発生した麻薬密売地区での殺人事件及び傷害事件

15日未明、16区カステラーヌで25歳男性が何者かに頭部を撃ち抜かれて死亡した。凶器は2種類のけん銃であった。27日には、精神病棟から脱走してきた26歳男性が同地区で腿を銃撃され病院に搬送されており、麻薬密売が行われている同地区の治安が今なお悪いことを知らしめる結果となった。

●強盗（邦人被害なし）

(1) モンペリエで発生した宝石店強盗・人質立て籠もり事件

9日午後、中心街にある宝石店に銃を持った男1名が押し入り、店員2名を人質にとって店内に立て籠もった。現場に到着した特殊部隊が同店周囲を包囲しつつ説得を続け、最終的に犯人を投降させるに至った。人質に怪我はなし。この日はパリ発生テロ2事件（立て籠もり）が解決した日だったこともあり、発生当初は関連テロの可能性も懸念されたが、本件は強盗目的であった。

●傷害（邦人被害なし）

（１）ニームで発生した対立抗争とみられる重傷傷害事件

８日未明、帰宅途中の３０代男性が、待ち伏せしていたとみられる３人程度の乗車したアウディに追跡され銃を乱射された。被害者は自宅ガレージまで逃げ込むも、追いつかれ銃撃により重傷を負った。警察は本件を対立抗争とみて捜査を進めている。

（２）ニームで発生した警察官に対する公務執行妨害事件

９日の夕刻、中心街で若者１名の乗った車が職務中のニーム市警警官を轢いて逃走した。国家警察と市警が緊急配備を敷き共同捜索した結果、２時間後に駅近くで犯人の乗る車を発見したが、犯人が車を暴走させ近づいた警官をボンネットに乗り上げさせる等したことから、警官らが犯人目掛け発砲して制圧した。犯人は病院へ緊急搬送され、重傷ながら治療の結果生命の危機を脱した由。

（３）モンペリエで発生した若者敵対グループ間での重傷傷害事件

１３日夕方、１６歳と２３歳の若者２名がそれぞれ脚部と腹部をナイフで刺され重傷を負う事件が発生した。本件は敵対する若者グループによる喧嘩で、モンペリエの駅前で発生し、以降ホーム上、電車内と場所を変えて小競り合いを続け、最終的に降車後のケバブ店内で大事に至ったもの。既に未成年３名を含む８名が検挙され、ナイフや鉄製の棒が押収された。

（４）コルシカ島バスティアで発生したけん銃使用の相互傷害事件

１４日の日没後、市の中心街で５０代の男同士が喧嘩を始め、双方がけん銃を抜いたことから最終的に２名とも銃撃により病院搬送される事態となった。

●その他特異事件（邦人被害なし）

（１）コルシカ島オート・コルス県内で発生した爆破事件

１日、コルバラにあるオリーブ栽培協同組合で、建物の壁近くに仕掛けられたガスボンベによるとみられる爆破によって、建物の壁に穴が開き、加工前のオリーブを満載したトラックが破損した。負傷者・犯行声明ともになし。

（２）ガール県内におけるアルジェリア内戦時の拷問事件裁判（差戻し）

６日、１９９０年代のアルジェリア内戦時にイスラム原理主義者取締り名下で容疑者を拷問した容疑で、アルルに住むアルジェリア人２名を被告とした公判がガール重罪裁判所に差し戻された。この流れにつき、アムネスティ・インターナショナルや人権組織が「当該時期にアルジェリアで犯

した罪に関し同国人が裁かれるのは史上初」と評価する一方で、被告側弁護士は「ナチを拷問した疑いで元レジスタンスを訴迫するのと同じ行為だ」と非難している。

(3) モンペリエで発生した郵便局員に対する脅迫事件

19件の犯歴を持つモンペリエ在住の男（32歳）が、新たに脅迫の罪で逮捕された。12日午前中、この男は我が子宛の荷物を受け取りに郵便局に行ったが、身分確認書面を忘れたためその場での受け取りができないと知るや激昂し、郵便局員に「カラシニコフを取ってくるぞ」等脅し付け荷物を渡すよう迫った。結果男は投獄され、裁判を待つ身となった。

(4) マルセイユで発生した市バスに対する器物損壊事件

17日昼頃、14区 Flamants で停車中の市バス53番線が、何者かに空気銃による掃射を受け、運転席近くの窓ガラスにヒビが入った。この事件発生を受け、同路線はこの週末運行を中止した。

(5) エロー県ベズィエにおける爆発物の発見

ベズィエの検察官は20日、チェチェン系ロシア人5名を尋問したと発表した。当局は当初テロ謀議を疑ったが、被疑者らはむしろ一般犯罪を凶っていた模様。5名の内4名はモンペリエで、残りの1人はベズィエで拘束された。ベズィエ市の中心部に近いソークリエール競技場近郊で爆発物の隠し場所が発見された由。後の取り調べで犯人のうち1名が、同爆弾を用いて誰かを殺害する計画であった旨供述している。

(6) マルセイユにおける自動車窃盗団の検挙

13日、マルセイユで非常に巧妙な犯行手口を用いる自動車窃盗団12名が逮捕された。この窃盗団は、まず盗みたい車種の車両証明書を盗み出した上で、盗むと決めた同車種別車両の合い鍵作成に必要なコード情報入手する。そしてターゲット車両にGPS発信器を付けておき、同車の持ち主が人目に付かない所に駐車するのを待った上で、準備済の合い鍵で車を盗むというものであった。盗んだ後は足が付かないように目立った傷を修理したり車体番号を変造してからマルセイユ、アルジェリア、チュニジアなどで販売していた。主犯格の男は市内中心部（パニエ地区）に住む30代の男で、犯人らは精巧なイモビライザー用エンコード装置を所持していた。今回の手口による自動車盗被害は少なくとも54件に上るといふ。

(7) マルセイユにおけるサッカーチームを巡る組織犯罪の取締り

20日、「オリンピック・マルセイユ（OM）」の選手獲得を巡って選手代理人やその取り巻き、元OM選手ら14名が、会社財産横領の他、組織犯罪集団による資金強要・隠匿の容疑で拘束された。

(8) トゥールーズで発生した市バス内での軽微な爆破事件

25日夕方、市バスの運転席後方座席にいつの間にか置かれていたガスボンベが爆発する事案が発生した。負傷者はなくバスの被害も軽微であったが、爆発したのが手製のプラスチック製ガスボンベであったことから、警察は本件をテロとは認定しないものの、パリ発生のテロに便乗した悪質な悪戯とみて捜査を進めている。なお、同バス内にはバスの床上からも同じようなガスボンベが発見されたが、こちらは不発に終わり、バスから出した後に破裂している。

なお、本件が発生した市バス14番線は、日頃から運転手に対する脅迫や罵詈雑言が浴びせられる悪質路線として知られており、市バス労組は、問題のある停留所を路線から外す等の安全措置がなされない限り運転しない旨を市側に通告した。

(9) トゥールーズで発生したユダヤ教司祭に対する脅迫事件とそのてん末

30日、ユダヤ教司祭の自宅に「妻と子供らを殺す」との脅迫電話があり、パリでテロが発生した直後ということもあり、司祭は警察に被害届を提出した。ところが警察が捜査した結果、被害者の知人子息（9歳）による悪戯であることが判明した。被害者が訴えを取り消そうとするも、本件が既に検察局に書類送致された後だったことから被害取下げできなかった由。

(10) マルセイユで発生したテロ発生後の警戒体制を狙った悪戯事案

29日、10区 Pont-de-Vivieux にあるユダヤ礼拝所周辺において、同所警戒中の兵士や通行人に向かってペイントボールを投げつける悪戯が発生し、20代の若者4名が逮捕された。本件は、自動小銃を持った兵士らが同悪戯をテロ攻撃と誤認しなかったことから大事に至らなかったが、あまりの軽率な行為に捜査関係者も驚きを隠さなかった由。

※ ここに掲載した事件は新聞等の公開情報を基にまとめておりますが、掲載した事件以外にも日々各種事件が発生していることを申し添えさせていただきます。